長中魂

平成２９年７月２０日（木）

第１３号

伊豆の国市立長岡中学校だより

文責　守野　和弘

授業紹介特集　－人一授業公開・紹介③～⑥　～『対話を通して深く学ぶ授業作り』を目指して～

☆☆学習課題「運動の楽しさを感じよう」☆☆

３年学年主任：山口麻和先生（６・７・８組・体育）

６・７・８組は特別支援学級です。運動技能に個人差はありますが、縄跳びの８の字跳び、バスケットのゴール、バトミントンなどを生徒はどんどん取り組んでいます。みんな山口先生のことが大好きです。それは、自ら汗をかいて運動している姿を見せていること、生徒とのスキンシップ、一人一人への絶妙な褒め、できなくても前よりもできたところを認めるなどの声掛けを笑顔で行います。一人一人が好きで大事にしているから、山口先生とのやりとりを楽しみにしているから、バトミントンを山口先生とラリーをするのを他の生徒はちゃんと待っていられます。山口先生の体育教師としてのモットーは、**「どの子も、どの競技でも体育を好きにさせること」**です。言葉どおり、どの生徒も運動の楽しさを感じて、自ら運動に親しむ姿がありました。

☆☆学習課題「振り子の途中に棒を入れるとおもりはどこまで上がるか」☆☆

３年担任：佐野秀樹先生（３年４組・理科）

前時までに、運動エネルギーと位置エネルギーは互いに移り変わる。力学的エネルギーは保存されるという学習を行ってきています。本時は図のように「中心の横から落とした振り子の途中につっかえ棒を置いたとき、振り子はどこまで上がるのか」を考えました。「元の位置まで上がるのでは」「棒でじゃまされるので、棒の高さまで上がるのではないか」「勢いがついてクルッと回ってしまうのではないか」等の予想が出ました。興味をもった生徒は、早速実験を行っていきました。棒が振り子の長さの半分より上にあるときには、振り子が元の高さまで上がることを確かめました。ところが半分より下だとクルッと回ってしまいました。生徒たちは、振り子を前にして、なぜそうなるのか疑問をもちました。振り子を前にして対話を始めました。前時までに学習した「位置エネルギー」「運動エネルギー」という言葉を使って、「つっかえ棒が上の方では、振り子がもっていた運動エネルギーがすべて位置エネルギーに戻るまで上がるので、同じ高さまで上がる」「つっかえ棒が下の方では、振り子が元の高さまで上がることができず、運動エネルギーが残っているのでクルッと回る」などの意見にまとまっていきました。

佐野先生の理科教師としてのモットーは**「さまざまな場面で、どうして？なぜ？と考える力をつけること。」**です。そのために、日々の授業での教材研究に余念がありません。

☆☆学習課題「ちがいのちがい」☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

３年担任：勢万一哉先生（３年１組・社会）

公民の授業です。基本的人権の「平等権」の学習の導入です。前時に世の中にあってよい違い、あってはいけない違いについて自分なりに考えています。例えば、「野球部では、上級生はグラウンドの整備をしないが、下級生はいつもしなければならない。」について、○と考える生徒も×と考える生徒もいます。それについて、まずグループで話し合いました。「先輩、後輩という関係は必要だからあってよい違いだと思う。」「グラウンドはみんなが使う場所だから、先輩、後輩に関係なく整備すべきだと思う。」と対立します。「外国人のＣさんは、日本国籍を持っていないという理由でマンションの入居を断られた。」については「国籍を持っていないという理由だけで入れないのはかわいそうだ。」等の意見が多数派となりました。やがて、文化や風土、宗教の違いはあってよいが、日本国籍がないから、人種・宗教が違うからなどという違いで違う待遇を受ける、人として不快になるのはよくないことに気が付きました。そういうのが「差別」であることに、対話を通して気付いていきました。

次時には、不快な思いをする人がいないように日本国憲法ではどのように「人権」を守っているのかについて学習していきました。勢万先生の社会科教師としてのモットーは**「世の中のことがらについて、一方的な情報に流されることなく、多面的・多角的な視点をもち、様々な見方や考え方ができる、正しく判断できる社会人になってほしい。」**ということです。

☆☆学習課題「のこぎりの仕組みを考えよう」☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

２年担任：川﨑　淳先生（１年２組・技術科）

杉板を使ってアタッシュケースの製作を行っています。設計図をかき、杉板へのけがきが終わり、いよいよのこぎりで切断していく段になっています。さて、川﨑先生から両刃のこぎりが提示されました。「何で刃が２種類あるの？」生徒からは、「木の種類で使い分ける。」「切り始めと切り終わりで使い分ける」などの発言がありました。刃のようすを観察させると、「Ａは刃先が四角っぽいのに、Ｂの刃先はナイフのようになっている。」ことに気づきました。そこで先生は杉の株を机の上に置き、「木を切るには２つの方向があるね。一つは木目（繊維）方向、一つは木目（繊維）を切断する方向だね。ＡとＢ、どちらの刃が繊維方向を切る刃でしょうか？」と発問しました。考えやすいように、繊維モデル、両刃のモデルも各班に分けて考えさせました。すると「Ａの刃は、繊維に引っかかるから、いっぺんに引っかけて切るんじゃないの。だから縦方向はＢの刃だ。」と言う意見、「そうじゃないよ。Ｂの刃はナイフみたいから繊維を切っていくのに楽なんだよ。だからＡの刃で縦方向に木部を削っていくように切っていくんだよ。」という対立意見が出ました。そこで、実際にＡの刃で縦横方向、Ｂの刃で縦横方向を切断してみました。のこぎり引きの経験が少なく、慣れていない生徒は、Ａの縦引きの刃が繊維を切断するのには力がかかって向いていないことが分かっても、繊維方向に切断するのにＡの刃もＢの刃もあまり違いは感じられなかったようです。しかし、Ａの縦引きで繊維方向に切断した方が、曲がりにくいことに気付いた生徒もいました。その気づきが、次時以降に生きていくことと思いました。

さて、川﨑先生の技術科教師としてのモットーは**「先人の知恵や工夫を知り、新しい時代を創り出す。未来の担い手になってほしい。」**ということです。